

「ハレとケ」 通信

第11号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のなかで暮らす

を楽しむ暮らしを提案する季

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築

「ねむ工房」

「ハレとケ」のある 暮らしかた

【お月見／中秋の名月】

花ある数寄屋（7）

【建物が語ることの出来るもの】

中津万象園「花の歳時記」（11）

アジサイ

かさねの色（11）「花薄」

（11）



平成 23 年 6 月発行

数年前に訪れた、槍ヶ岳。写真は梓川、ガスの向こうに見えるのは明神岳。

設計／プランアーク建築事務所・施工／富士建設株式会社

「ねむ工房」

「町のシンボル」と聞くと、なんだか大きな建物を想像してしまうかもしれませんが、でも、「ひとが集う場所」をシンボルと考えるならば、それはたとえば、多くの人が『自分の居場所』と感じる」との出来る場所のことなのかも。

…今回の物語の主角、「ねむ工房」は、そんな、あたたかな地域のシンボルとなりそうです。



琴平町上櫛梨、香川県道206号原田琴平線を少し入ったところに、小さな黒い建物がある。特定非営利活動法人【ねむ工房】の運営する、障害者（知的・身体・精神）に就労継続支援B型と生活介護とを提供する、指定障害福祉サービス事業所である。

すつきりとかわいい建物の中を覗くと、まるで小学校の家庭科室のような、大きな流し台と調理台が目に入る。「近所の皆様が集まって何かできるような場所にしたいし、これからまた新たな農産物の加工を手がけるかもしれないから、敢えて業務用の大きなものを据え付けた」。そう説明してくれたのは、この施設の所長である池内さんだ。

「ねむ工房」が誕生したのは、平成5年7月。もともとは、丸亀養護学校を卒業した生徒の保護者と、琴平町社会福祉協議会とが協力しあい設立した小規模作業所である。

設立当初からの主な作業内容は、「木工」。まんのう町にあった『共生の里』という施設で使われていた木工用の機械を譲り受けたことから、白木のシンプルなおもちゃを作るようになった。作業所を

利用するメンバーは、琴平、琴南、満濃、仲南と広域にわたり、年齢も十八歳から六十歳超までと幅広い。

設立以来、長年木工作品を作り続けてきたねむ工房だが、百円ショップなどでも白木の商品が扱われるようになり、白木のおもちゃに対する人びとの需要が変化。数年前より木工作品の売上が減少したことから、木工だけを就労継続支援の柱とすることに不安を覚えていたところ、琴平町の社会福祉協議会から、にんにくを使った町おこしの手伝いをしないか、という紹介が舞い込んだ。

それが、今では琴平発の有名なブランド商品となった、【ガリック娘】の企画である。

実は、香川県は青森県に次ぐにんにくの生産地。（ねむ工房の池内さんによると、「青森県が横綱とすると、香川は二位は二位でも前頭くらい」のレベルの差がある」とのことだが。）その香川県でも、琴平町は大きなシェアを占める。

その琴平町の特産品であるにんにくの“規格外”のものを有効に利用し、観光業と農業を組み合わせて町おこしに使えるか…と県のマッチング登録システムを活用した農商工連携の計画として持ち



↑カラフルな色で塗られた扉。



↑長い時間を過ごす作業棟だからこそ、居心地よく…

上がったのが、この【ガアリック娘】という商品の開発だった。

【ガアリック娘】はオリーブオイルにんにくの成分を加熱・抽出した商品だが、この加工プロセスのうち、ねむ工房は一次加工（割る、皮を剥く、スライスをする、冷凍）までの作業を担当する。これらの作業はにんにくの収穫時期である6月下旬から11月下旬まで続き、この一次加工のあと、小豆島へ送られ、そこでオリーブオイルにんにく成分を抽出・加工し、瓶詰め。その後、琴平町社会福祉協議会でラベルを貼られた後、社協を通じて販売される。そしてその利益の一部は福祉分野へ使われる。

そうして誕生した【ガアリック娘】だ

が、当初より好評で、実験的な段階ではねむ工房でも手作業で行なっていた皮むき等も、現在は機械を導入（一部手作業との併用）。今では年間100kg超もの出荷高となっているという。

また、ねむ工房ではこの一次加工の他、2年ほど前からにんにくの栽培も始め、作業所の近くの畑で農作業を行っている。「農作業と木工、どちらがメンバーの皆さまは好きなん？」と聞くと、「農作業の方が人気がある」とのこと、トラクターの必要な作業などはスタッフや地元農家の皆さまの力を借りながら、植え付け、除草、収穫…と作業をこなしているという。その話をしてくれた池内さん自身もメガネのツルの形に日焼けの跡が残るほどの、『農作業焼け』。「これからは、木工

と、農作業と、農産物加工の三本柱で取り組んでいく」と楽しそうに話をしてくれた。

そんなねむ工房にとって、今回の新しい建物は通算「3代目」の作業所となる。1代目、2代目は琴平町の中心地を転々としていたので、この上檜梨の作業所は初めての郊外地での立地だ。

この作業所移転には、2つの背景がある。ひとつは、築年数の古い建物であったことから、老朽化が進み、雨モレ・白蟻・地震に耐えられない…という事情があったこと。もうひとつは、障害者自立支援法に適合した事業者として指定を受けるために、NPO法人の資格を取得し、作業所施設設備の整備に着手したという

事情があった。

もともとねむ工房のような小規模作業所は、いわゆる「無認可」「法定外」と言われていた施設で、法に基づく指定があるわけではなく、何となく認可されていた…という性格だったという。それが、平成一八年に障害者自立支援法が成立し、これに指定されたサービスを行うためには法人格が必要となった。そこで、NPOの法人格を取得し、自立支援法に基づく事業者としての指定を受けようとしたところ、施設の老朽化が問題となり、自立支援法基盤整備事業の助成金を受けて、今回の新作業所建設となった…というわけだ。

この新作業所建設に当たって、設計を担当したのは【フランク建築事務所】の代表、柳能展さん。琴平町社会福祉協議会とねむ工房とが、「地元の設計者さんで、いい方がいれば…」と選任した。

琴平町で設計事務所を主宰している柳さんだが、実は、建築を志したのは二十二歳だという。二十二歳という年齢は、専門的な知識を必要とする建築家という職業としては、少し遅いスタートといえるかもしれない。そのことについて、柳さんは、あるホームページのインタビュー

「で、こんなふうを書いていた。
「自分の歩むべき道を探すために、いつも自問自答を繰り返していたとき、当時勤めていたアルバイト先の近くに、あの安藤忠雄さんの設計したオフィスビルがあった。もともと、もの創りが好きだったし、興味があったのも手伝って、軽い気持ちで安藤さんについて調べてみたら、『元ボクサーで独学で建築を学ぶ』という経歴に、一瞬に、目が止まった。当時学歴も経験もない自分にとっては、目からウロコの出来事で、今思えば、その瞬間が、今の私のスタートだった。」



↑大きな業務用の流し台・調理台。

そう語っている柳先生は、優しい魅力ある人柄の、とても素敵な設計者だ。

そして、この柳さんが提案したのが、「作業を行う時間の長い『作業棟』だからこそ、暑さ寒さに強い、快適で居心地良く、障害者に優しい空間にしましょう」というコンセプト。そこに、ねむ工房の「上檜梨の人たちの集まれる場所にした」という希望が合わさって、今のプランとなった。

この新作業所を構成するのは、新築された『作業棟』と、『生活介護棟』の二棟

である。まずは『作業棟』からご紹介すると…。

前述したように、『作業棟』に入ってまず目にはいるのが、小学校の家庭科室のような、大きな流し台と調理台。近所の人が集まって何かできる場になれば、そして、将来、他の農産物の加工を手がける際にも不便のないようにと、わざわざリクエストして設置した業務用の設備だ。その部屋を出て、カラフルな扉と、障害のある方にも使いやすい取っ手の取り付けられたトイレの前を通り、隣の部屋へ入ると、今度は白木の壁が目につく。この壁には、身体にまったく害のない、

自然素材の塗料による塗装が施されているが、これは実は、ねむ工房の利用者の皆さまと、スタッフが協力して塗ったものだ。これは「自分たちの手で建築に参加することで、より施設に愛着、愛情をもってほしい」という設計者・柳さんの思いから実現したもので、そこには「必ず何年か一度は塗料を塗り直すメンテナンスが必要なので、その際にも自分たちの手で楽しみながらできるようにしたい」という心づかいも込められている。また、建物には天窓も設けられ、「これから暑くなってくると、威力を発揮しよう」とねむ工房の皆さまも夏の訪れを楽し



↑自分たちの手で塗った壁。(ちょうどインフルエンザ蔓延の時期。予防のため、みんなマスク姿で…)

しみにしている。…というよりも、すでにこの天窓の存在を楽しんでいるとのことと、見学者が来た際には、「この天窓自動で開くんです。すごいやつ…ただし、閉めるんは手動やけどナ。」と開け閉めして披露しているとか。(笑)

そして、この『作業棟』と向かい合わせに立っているのが、作業に参加するのが難しいメンバーの利用する『生活介護棟』だ。

こちらカーペット、柵…とカラフルな色遣い。「この色はどなたが？」と尋ねると、「メンバーが自分で選んだんやで。」とのこと。グリーン、オレンジ…とかわいい組み合わせで、居心地の良い空間となっている。

作業所が竣工し、平成23年4月19日に行われた開所式には、大勢の地元の皆さまや、ねむ工房を応援する人びとが集まった。

その場で、所長である池内さんが語ったのは、「地域の皆様に『ここにねむ工房が来て本当に良かった』と言ってもらえるような場所になりたい」という思い。

今、ねむ工房の畑では、にんにくの他にじゃがいも、さつまいも、オクラ、ス

イートコーンが作られ、収穫した野菜はメンバーみんなで持って帰ったり、近所の皆さまにおすそ分けしたりしている。逆に、「近所から『花が咲いたけん』とお花をもらったりもする。

また、にんにくや野菜の植え付けや収穫では、近所の象郷小学校の三年生と一緒に作業を行い、楽しいひとときを過ごした。

着実に、地域の皆さまとねむ工房とを結ぶ絆は深まっているのだ。

池内さんは、ねむ工房のこれからについて、こう語る。

「今はそんなにたくさん作っていないけれど、いつか、ねむ工房でつくった野菜を、学校給食で食べてもらえるようになりたいし、近所のひとたちや小学生たちにも、一緒に色んな作業に参加してもらいたい。そして、地域に密着した作業所となり、自然に障害をもつ人たちとふれあえるような場所にしていきたい。

そうやって時を重ねていくうちに、きつといつか、『ねむ工房よ、よくこの上櫛梨の地に来てくれた！』と地域の皆さまに喜んでもらえるような場所になる。そのときには、この黒い小さな建物が、地域の人たちの集まるシンボリックな存在となればええな。」

近い将来、そんな場所になるだろうな…、そう感じてとても暖かな気持ちとなった、今回の「ねむ工房」にまつわる物語だった。(了)

*** 現場担当者から ***



りの新婚さんです。)

今回の「ねむ工房」の施工を担当したのは、工務部建築課主任(級建築士)管理技士の多田康乗。(先日結婚したばかり)

木造住宅の施工を多く手がけてきた多田は、お客さま、またお客さまの「家族(特に子どもたち)」から絶大な人気を誇る監督です。そんな、いつもニコニコとがんばっている多田(意外と頑固者というわけかも…)の『苦勞話を聞いてみました。』

琴平町にある障害者自立支援施設『ねむ工房』さんの施設増築で、既設建物に並べて施工した木造平屋建(※32坪)を担当しました。私にとっては、初めて担当させていただく設計事務所さんでしたので、『どんな方だろう』と思いつながら、起工式の日に初顔合わせをしたのですが、気難しくない、感じの良い人だなと思ったこと、そして、施主さんも話しやすい方で良かったなあと思ったのを記憶しています。建物は、施設、という事で、設計の先生も車椅子の方が利用してもいいよう

にスロープを設けたり、極力バリアフリーになるよう細かく設計されていましたが、毎週1回定例会を開催していたこともあり、施工側からすれば、非常にやりやす〜、ありがたかったです。

すごく難しい建物というわけではなかったのですが、問題点としては、ちょうど時期的に断熱材(グラスウール・スタイロフォーム)の供給不足の時期と重なり、現場も断熱材が入荷しない状況になったこと。本当はあつてはいけないことですが、「無い物はしょうがないよな」と、グラスウールよりも高価な代替品(発泡ウレタンフォーム)で工事を進めていくことを承けていただき、工期内に無事完了することができて、ホッとしました。

また、今回は、工事の途中で、「施設を利用する方々で建物内部の木部を自然塗料で塗装する」というイベントがあり、みなさんがこれから自分達が利用する建物の一部を、記念として楽しく塗ったりしていたのが印象的でした。

あと、問題…と言うよりは困った事が…。それは、障害者自立支援施設で、国からの補助事業だったことから、各段階の工事写真等提出書類がたくさんあったこと。これには書類作成の苦手な私は苦労しました(笑)。施主さん・設計さん共にクレーム等無く引渡し出来ましたことは良かったと思っています。

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(11)「お月見／中秋の名月」

毎年中秋の名月に近いお休みの日、中津万象園で開催される『月見の宴』ですが、今年で二十九回目を迎えます。皆さま、お越しくださいましたことありがとうございます。例年、月明かりのもとでお茶を飲んでいただき、その後、豪華ゲストによる野外ステージを行っています。

さてこの『月見』ですが、調べてみるとおもしろいと感じる内容がありましたので、ご紹介いたします。

◆お月見の習慣◆

お月見と聞くと、十五夜を思い浮かべる方も多いと思いますが、実際日本におけるお月見は、十五夜と十三夜の二回。旧暦八月十五日の十五夜にお月見をしたら、ひと月後の十三夜もお月見をします。昔は、十五夜と十三夜のどちらか片方だけ観月することは「片見月」といって、縁起が悪いとされていたため、十三夜を「のちの月見」として、二回行われてきました。

日本における「お月見」の始まりですが、月を愛でる習慣は縄文時代からあったとされていますが、観月の風習は、平安時代に中国から伝わり、貴族の間で宴が行われるようになった頃からだとされています。当

時の宴は、詩歌を詠じ、管弦を主とした風流なものでした。また、月見といっても

＜月の満ち欠け＞



直接月を見るのではなく、舟などに乗り、水面や杯の酒に揺れる月を楽しんでいたようです。現在のように供物をするようになったのは江戸時代に入り、庶民の間に広まってから。農民の間では、十五夜の満月は

豊穣を象徴するものとして、収穫の儀礼をとり行う大切な節目でもあったようです。秋は収穫の時期ということもあり、その年の収穫物を月にお供えする風習が各地に広まったとされています。

◆中秋の名月と仲秋の名月◆

『中秋の名月』『仲秋の名月』どちらも同じ『ちゅうしゅうのめいづつ』と読みますが、厳密にいうと、意味合いが違います。日本の旧暦では、一月から三ヶ月毎に季節が変わりますが

（『春夏秋冬』、その季節の名に※『孟・仲・季（中国では兄弟の年の順を表す場合に用いられ、孟から年長者、仲は真ん中、季は末っ子を表します。）』の文字をつけ、さらに季節を分けていました。例えば、旧暦の六月は『季夏』。手紙などに書かれる季節のあいさつに、『孟

春の候』や『仲秋の候』などと使われているのには、こういったいわれがあったのです。

この季節の細分によれば、「八月」は秋の真ん中となり、「仲秋」とは、旧暦八月全体のことをさします。

逆に、「中秋」は、秋の真ん中の、月の真ん中の日である旧暦八月十五日をさします。つまり、秋全体の真ん中の日という意味を持ちます。

◆中秋の名月は毎年仏滅？◆

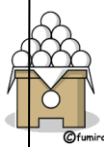
「今日は大安だから日がいい。」というような会話をされることはありませんか？ 大安・良日、仏滅・悪い日というイメージが少なからずあると思いますが、中秋の名月はなんと、毎年仏滅なのです。

大安や仏滅とは、旧暦の頃に使われていた曜日のひとつで六曜といい、『先勝』『友引』『先負』『仏滅』『大安』『赤口』の順で繰り返されます。旧暦では毎月一日の六曜が決まっており、二日以降はその次の六曜へと順に繰り返されます。

旧暦八月一日は『友引』と決まっていますので、先ほどの順からいくと八月十五日は、必ず『仏滅』となるのです。

今年の『中秋の名月』は新暦でいうと九月十二日（仏滅）です。今年のお月見は、空の月を仰ぎ見るのではなく、杯の酒に映った月を眺めてみるのも風流でよいかもしれませんね。

中津万象園での『月見の宴』は、新暦十月八日の予定です。皆さま是非、お越しください。 （文・土岐 倫子）



花ある数寄屋（7）

わたしたちが提案したいのは、依頼主の美学を反映した空間
品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、
数寄屋の魅力を紹介します。

「建物が語る」ことのできるもの」

【床の間】

「肌感覚としての「畏れ」、

上座と下座を生む秩序」を語る

本来は本尊などの宗教的なものを祀り神聖な場所とし、その後、素晴らしいもの、大切なものを飾る場所となっていた「床の間」。踏んだりしてはいけない神聖な場所であると同時に、花をいけたり、掛け軸を替えたり…と季節感や招く相手への気持ちを表現できる場所でもあります。

そんな、いわばショーアップできる空間とも言える床の間ですが、実は、上座・下座というのはこれを中心に生まれた秩序。床の間は相手を敬う気持ちを自然に意識させる場所です。

【神棚】

「目には見えなくとも、

敬うべき存在がある」ことを語る

ある神主さんが、いつも、話してくれることがあります。

極端に聞こえるかもしれませんが、それは、「人間の家と、動物の巣」の違い。

「快適で居心地が良く、くつろげて…、ただそれだけなら、人間の家に限ったことでなく、『よく出来た巣』ではないのか？」という問題提起は、ものすごく新鮮でした。

では、何があれば、それは巣ではなく家になるのか？

それは、『心の拠り所』があるかどうか。

敬うべきものを家の中に据えることで、なにかもが理屈で説明が出来るわけではなく、目に見えなくとも感謝すべき対象があることを感じ、それが精神の立体感を生むと言います。

今、どんどん建っている住宅を見ていて、

「なぜ、こんなに昔と今の家って、違っただろう？」と感じたことはありませんか？

たぶん、住宅を大きく変えたのは、『暮らし方の変化』。

『暮らし方の変化』が、住宅の姿を変え、風景を変え、価値観を変えていく…。

もしかしたら、「未来の日本をになう子どもたちが何を大切に思っのか」は、毎日の『暮らし方』にかかっているのかも。

『暮らし場所＝住宅』をつくるって、『未来の日本をつくること』かもしれません。

では、建物が語ることのできるものって、なんでしょう？。

数寄屋ならではの空間で考えてみました。

【座（畳）】

「相手を気にかけること」を語る

相手が畳に座っているときに、お茶を出す。話しかける…そのとき、立ち上がったままですれをするひとは、まずいない、と思うのです。

自分も座る、膝をつく。相手の高さになら自然に視線を合わせるはず。そして、立ち上がるときには自然とその前に「失礼します」と礼をする。

日本の所作には、相手を思いやる気持ち、謙讓の気持ちが随所にちりばめられています。

また、畳に座った高さは、つまり、小さな子どもに見えている世界。子育ての時、そんなことを意識して家づくりをしてみても良いかもしれません。



「花の歳時記（11）アジサイ」

万象園の西北部に位置する石投げ地蔵尊の祠あたりは、老松が鬱蒼と茂り、緑に囲まれた癒しの空間であります。そして老松を中心として癒し効果を更に高めてくれるのが、早春のヤブツバキと梅雨期のアジサイとであります。

アジサイは日本原産の落葉低木で、万葉集にも詠われています。その一句を「紹介」

あじさいの八重さくんとく

やつ代にをいませ吾背子見つしのはむ

（橘諸兄）

（あじさいの花が八重に勢いよく群がり咲くように、いつまでもあなたが健康でいてください）

和名「アジサイ」の起こりは、奈良時代の呼び名「集員藍（あづさあい）藍色の小さな花が集まって咲く（意）」が訛ったものとされています。

なおアジサイは漢字の「紫陽花」を当てていますが、最初の命名者は唐代の詩人白楽天（772-846）で、その詩『招賢寺に山花一樹あり、人その名を知るものなし、色は紫色に花は香気を宿し、芳麗にしてまことに愛すべし、よって紫陽花と名づく』によっています。これを平安時代の博物学者源順が、白楽天の紫陽花をアジサイと解し「倭名類聚抄」に記載したのがその起こりで、その後一般に広まったものと考えられています。

万象園のアジサイは関東地方南部や伊豆地方などの海岸に自生しているガクアジサイを母種とした園芸品種で、花のように見えるのは、4個の萼片が発達した装飾花が多数集まったもので、その気品と豪華さにおいて梅雨期ではこの右に出る花はありません。（長岡 公）

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路 坂出北ICより約8.5km／約15分
坂出ICより約14km／約20分
高速道路善通寺ICより約5km 約10分



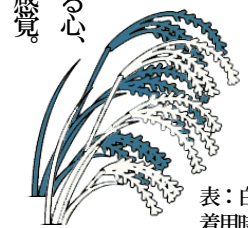
【長岡 公 氏】

昭和2年10月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和26年3月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和26年4月以降 香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・
笠田高等学校・農業経営高等学校教諭
高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和63年3月 定年退職 香川西高等学校教頭
現在 公益財団法人中津万象園保勝会 理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林 玉藻編／中 西謙編）がある。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色（11）

「花薄」



表：白／裏：淡紫
着用時期は秋初。

「尾花」とも呼ばれる薄は、獣の尾のように見える独特な姿が印象的であるために、歌にも多く詠まれた。

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういつたものの結晶とも言える「重色目（かさねいろめ）」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

【編集後記】 今回の「物語のある建築」の主人公は、琴平の小さな施設「ねむ工房」。実はこの池内所長さんは、ご家族ぐるみでの大事な山友たちでもあります。学生の頃に覚えた『山登り』と『野草を見ること』は、今でも一番の気分転換法。でも、このところ休みが取れず、めったに山へ行けません。そんな時には落ち込みますが、その分、山行予定が立ったときには嬉しく、まさに指折り数えてその日を楽しみに待っています。

さて、先日、遅ればせながら『もしドラ』を読みました。「富士建設とは何をする会社なのか」と問われれば私は、「何かを実現するために新しい場所がほしい」と思っている人にその場所を提供し、その実現を助けること」と答えます。じゃあ、お客さまが実現したいと思っていることってナンだろう？ 顧客が快適に買い物できる空間がほしい、家族ともっと幸せに暮らしたい、社員が気持ちよく仕事の出来る環境にしたい…、考えているうちに、私たちにとってのお客さまにも、さらに「幸せにしたい顧客」といふべき対象がいることに気が付きました。みんな、誰かを幸せにするために、何かをしているんだな、そう思うと、なんだか嬉しくなりました。

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



建設業許可：香川県知事許可（特18）第189号
／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号
／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第1997号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588(0120-832589)
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail y-manabe@fujikensetsu.jp（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭